







ここが…

ドキ

ドキ

『カフェ・ド・ミル』

CLOSE

ワッ…

叔父さん、
私を導いて…!!



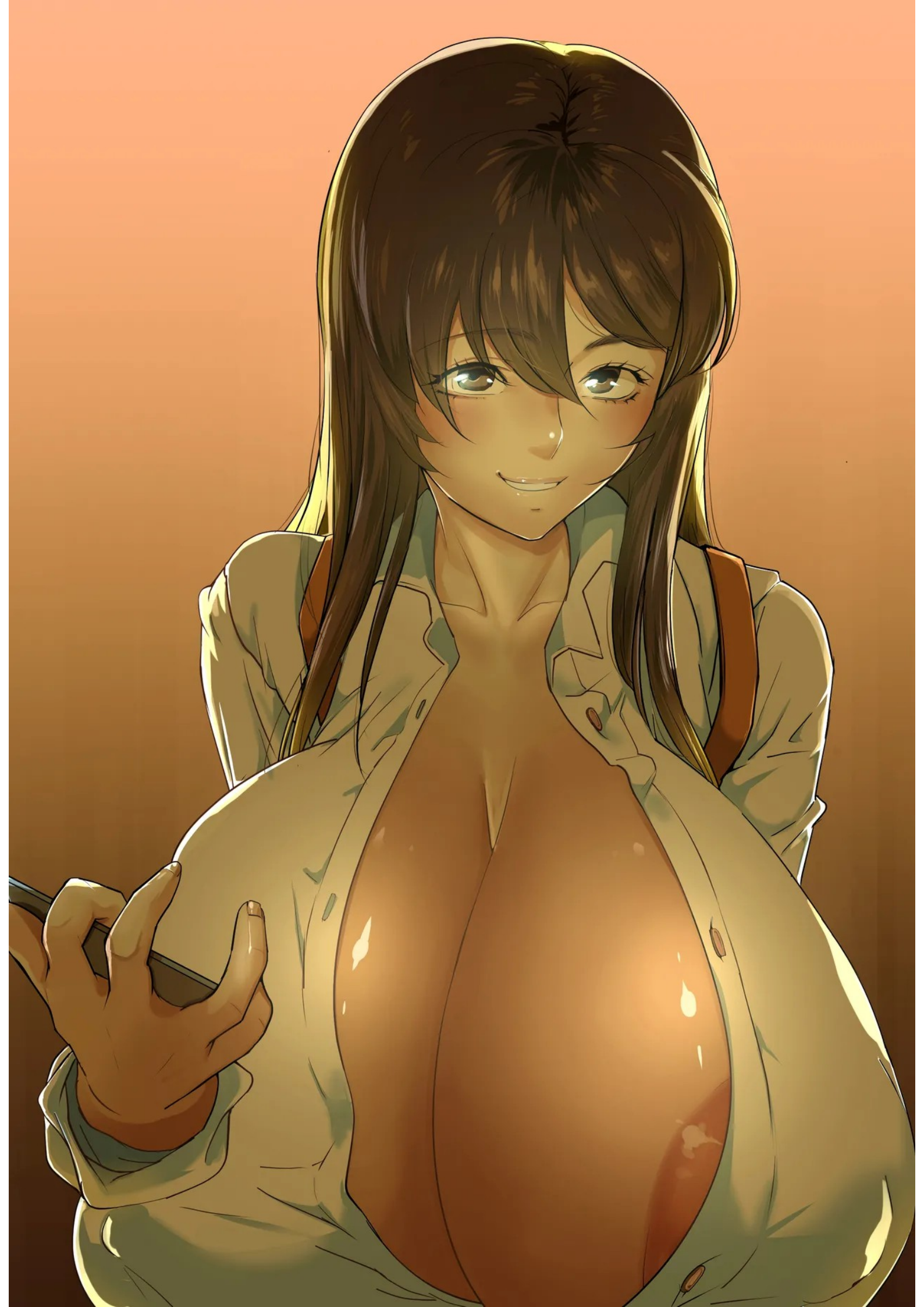






Tasty!!

はは...



















ミルクコーヒー

5,000円

























お店を開けて一週間。

お客さまは1日に2、3人いらつしやいます。

お店の評判は…正直良くないと思います。

皆さんコーヒーを一口飲んで首を傾げ、懨然とした表情で席を立たれます。
当然の反応です。

『一杯800円のインスタントコーヒー』を出されて、誰が満足いくでしょうか？
しかもメニューはたったこれだけなんです。

でも、運転資金が0の今はコーヒー豆も仕入れる事ができません。

もう少しだけ！収益がもう少し上がれば豆を仕入れてお菓子を焼いて…。

これはギリギリの賭けなのです。

こんな経営を続けていたら、信用を失ってしまいます。

早くこの状況を脱しなければ、どちらにしても未来はありません。

『ちよつとキミ！ いいかね？』

狭い店内にお客さまの声が響きました。

その語気から察するに、不機嫌なのは明らかです。

私は恐る恐るお客様のもとへ向かいました。

「恐る恐る」向かった理由は二つありました。

お客様からお叱りを受ける事が分かっていたから。

これが一つ目の理由です。何せ心当たりがあり過ぎます。

そして二つ目は、急いで動く胸のボタンが飛びそうな程に制服がパツパツだったからです。

【思い】をひとつにしたくて譲り受けたこの叔父の制服、私には少々キツかった様です。

叔父は比較的大柄な体型だったので。

お客さまの横まで行くと、やはり想像通りのご指摘が待っていました。

『なんだね！このコーヒーの味は……！！』

…そうです、当たり前です。

何もかもが足りないのです。私自身でさえ、まだこの店と心を通わせていないのに…。

私はこれまで気付かない様にしてきた罪悪感に一気に襲われました。

これまで来店されたお客さまの表情を次々思い出し、ただただ頭を下げる事しかできませんでした。

私は何をやっているのでしょうか…！

お客さまを失望させ、叔父の顔に泥を塗るだけじゃないの…！


尚もお客さまは私を睨んでおいでです。

私はこみ上げて来る涙を抑え、何度も頭を下げ続けました。

30秒ほどの沈黙は突然破られました。

バアアアアン！！

と大きな破裂音が店内に響き渡ったのです。



ああ…！

恐れていたことが起こってしまいました。

大きな音を立てて弾けたのは私の制服だったのです。

私はその場で激しく揺れる胸を必死で抑えました。

お客さまはその光景を目を丸くして見えています。

さぞや驚かれたことでしょう。私だってそうです。

…でも、本当に驚いたのはその後でした。

「お、美味しいよ……。はは……。いい店だね。」

お客さまの顔からはスツカリ怒りが消え、笑顔が溢れていました。

この時の衝撃を、私は生涯忘れないでしょう。

一つのアクシデントがお客さまの荒んだ心を癒し、不味いコーヒートを美味しくしたのです！

しかもそれを成し遂げたのは、コンプレックスでしかなかったこのカラダでした。

疎ましくさえ思ってた来たこの大きな胸が、神様から与えられたギフトだと確信しました。

そして、人に尽くす事の喜びを知るに至ったのです。

私なら出来る！もっとお客さまに喜んで欲しい！

私にもう迷いはありませんでした。

はは...



それから、この店ではちよくちよく「アクシデント」が起こるようになりました。

注文を取りに行くとき、「たまたま」シャツのボタンが弾けてしまい、

そんな時に限って「たまたま」私はブラジャーをつけ忘れていたりして…。

全部「たまたま」起こったアクシデントです。

でも、この「時々」と言うには良く起こるアクシデントを楽しみに通うお客さまが増えています。

コーヒーも今は一杯2000円です。味は以前と変わりません。

これはお客さまからの提案でした。

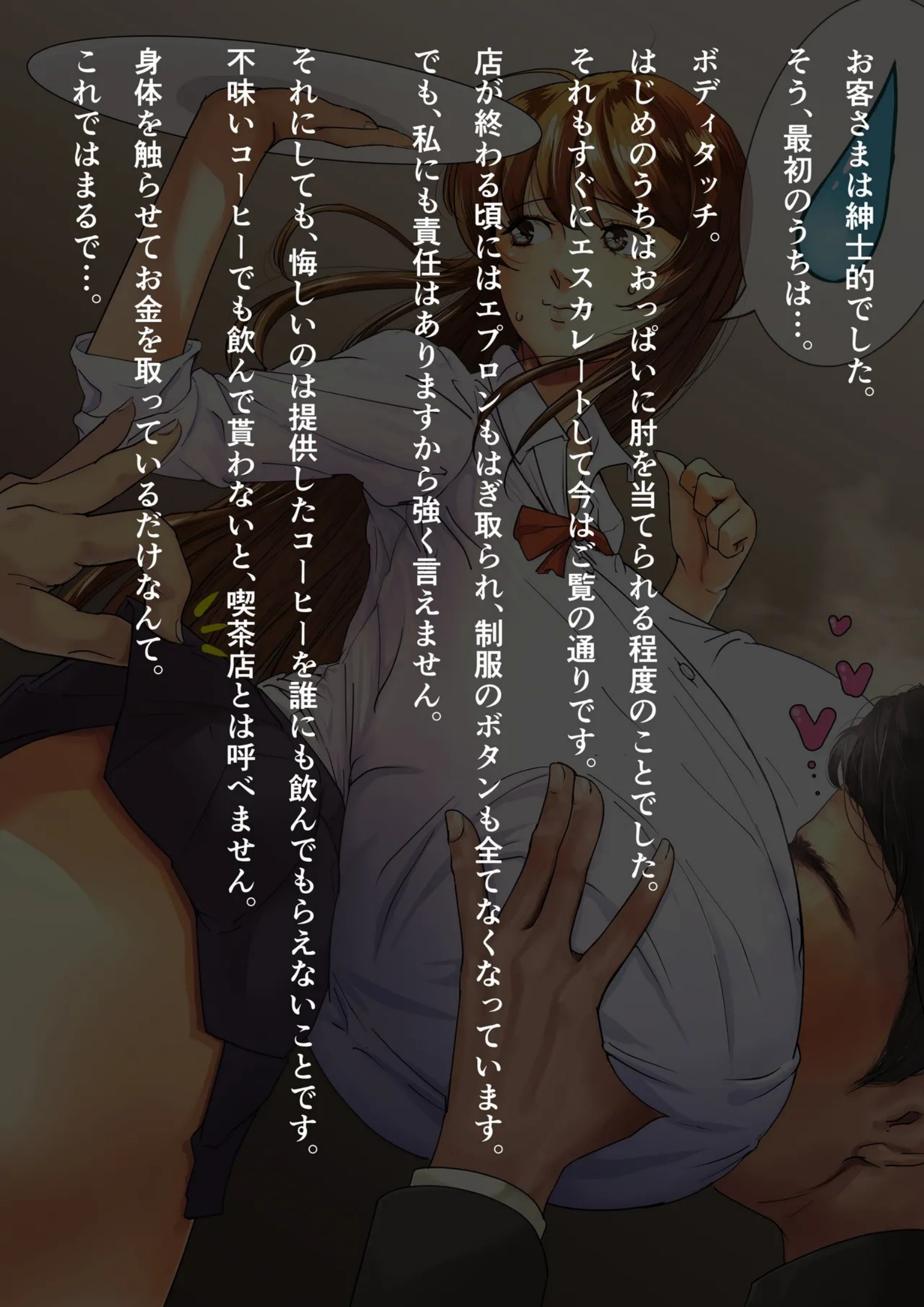
美味しくないコーヒーに2000円払ってもいいと言って下さるのです。

コーヒー一杯で何時間も過ごすお客さまばかりなので、正直とても助かっています。

常連のお客さまも増えて順風満帆。

そう、ここまででは順調そのものでした。

ここまででは…。



お客さまは紳士的でした。

そう、最初のうちは…。

ボディタッチ。

はじめのうちはおっぱいに肘を当てられる程度のことでした。

それもすぐにエスカレートして今はご覧の通りです。

店が終わる頃にはエプロンもはぎ取られ、制服のボタンも全てなくなっています。

でも、私にも責任はありますから強く言えません。

それにしても、悔しいのは提供したコーヒーを誰にも飲んでももらえないことです。

不味いコーヒーでも飲んで貰わないと、喫茶店とは呼べません。

身体を触らせてお金を取っているだけなんて。

これではまるで…。



「君のおっぱいは母乳が出そうだね！」

お客さまのセクハラ発言に衝撃が走りました。

コーヒーマイルクは高価で諦めていたのです。

でも、私がミルクを出せるなら、無料で幾らでもミルクを提供できます。

バカな発想でかもしれませんが、私は追い詰められているのです。

私の大きな胸はこんな時にこそ役に立たなくてはいけない筈です。

でも…

でも…出ませんでした。

張り詰めている感じはありますが、肝心のミルクが出ないのです。

「手伝ってあげようか？」

振り向くとカウンター越しに笑顔のお客さまがおられました。

とんでもない！そんなこと！

…と言いたい所ですが、私は考え直しました。

男性の力で思い切り搾って貰えばもしかしたら…。

カウンターの奥に引き入れて、お願いしました。

思い切り搾ってくださいと…！

お客さまは鼻息荒く、私に覆い被さる勢いで胸を揉みました。

浅黒く太い腕で、顔を真っ赤に紅潮させて…

「任せたまえ！子どもの頃は山羊の乳を毎日搾って…うわスッゲ！」

途中から話すことも忘れて夢中で揉んでおられます。

変形する程の力で胸をこねられると、次第に私もなんだか高まって来て…



I took over the coffee shop of my late uncle.

But there is no money.

I am the only employee.

There is only instant coffee on the menu.

You can't buy coffee beans without money.

Besides, I have little experience in serving customers.

The number of customers does not increase at all even after a week has passed since the store opened.

If nothing is done, the store will collapse ...

An incident happened to me who was impatient today.



"Hey! Come on!

The customer calls me.

I want to rush up, but I can't.

If you move in a hurry, the button on your chest seems to pop.

"What is the taste of this coffee! ??

The customer glares at me and says.


I continued to apologize with pity.

It was impossible for me, who was inexperienced, to run a cafe.

The incident happened in an awkward atmosphere.

Baaan !!

A tremendous bursting sound echoed throughout the store!



Ahh...!

What I was afraid of has happened.

It was my uniform that popped with a loud noise.

Both I and the customer are surprised.

But it was after that that I was really surprised.



"It's delicious coffee. It's a good store...".

The customer who was angry a while ago has a big smile.

This embarrassing accident has caused two miracles!

Soothed his rough heart.

And he turned the bad coffee into a delicious one!

My boobs have great potential.

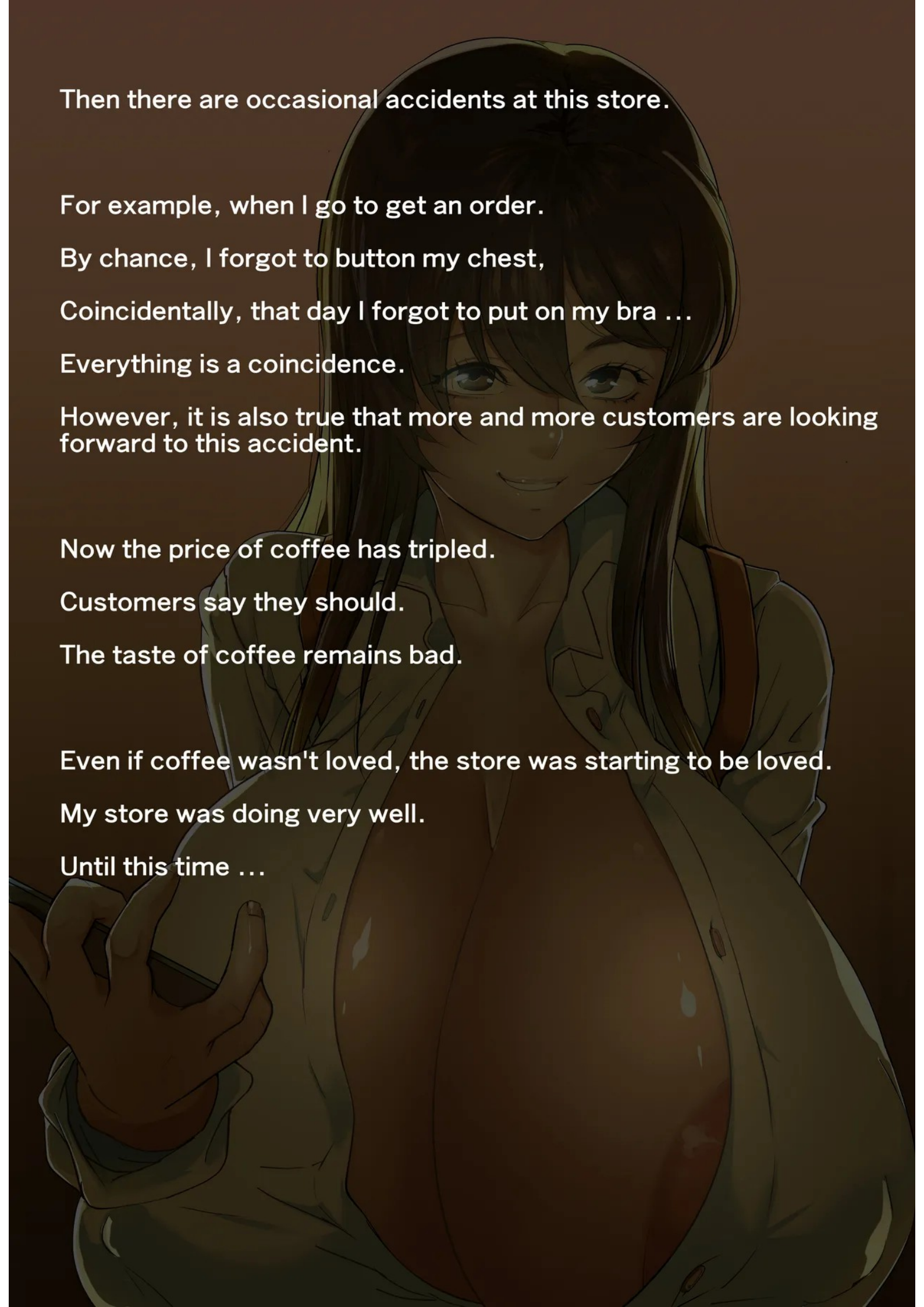
To this conspicuous boobs that I hated for a long time.

This experience gave me great joy.

And it led to confidence.

No more hesitation.

I want to make our customers happier!



Then there are occasional accidents at this store.

For example, when I go to get an order.

By chance, I forgot to button my chest,

Coincidentally, that day I forgot to put on my bra ...

Everything is a coincidence.

However, it is also true that more and more customers are looking forward to this accident.

Now the price of coffee has tripled.

Customers say they should.

The taste of coffee remains bad.

Even if coffee wasn't loved, the store was starting to be loved.

My store was doing very well.

Until this time ...



The customer was a gentleman.

Yes, at first ...

Body touch.

At first, I could just put my elbows on my boobs.

It escalated soon and you can see it now.

By the end of the store, the apron had been stripped off and all the buttons on the uniform had disappeared.

But I'm also responsible, so I can't say it strongly.

Even so, the regrettable thing is that no one can drink the coffee I provided.

You can't call it a coffee shop unless you drink even bad coffee.

I'm just touching my body and taking money.

This is like ...

The background is a dark, semi-transparent illustration. It depicts a woman with large breasts, looking down with a concerned expression. To her right, a man is peering over a wooden railing, looking towards her. The overall tone is somber and tense.

"Your boobs are likely to breastfeed!"

I was shocked by the sexual harassment of customers.

Coffee milk was expensive and I had given up.

But if I can serve milk, I can serve as much milk as I want for free.

It may be a stupid idea, but I'm being cornered.

My big breasts should be useful at such times.

But ...

But ... it didn't come out.

It feels tense, but the essential milk doesn't come out.

"Shall I help you?"

When I turned around, there was a smiling customer over the counter.
N

o way! That kind of thing!

I would like to say, but I reconsidered.

Maybe if you squeeze it with the power of a man ...

I pulled it into the back of the counter and asked.

Please squeeze as much as you can ...!

The customer was suffocating and rubbed his breasts with the force that covered me.

With dark and thick arms, make your face bright red ...

"Leave it to me! When I was a kid, I squeezed goat's milk every day ... Wow!"

He forgets to talk from the middle and is crazy about it.

When I knead my breasts with enough force to deform, I gradually get higher ...

